

## ドキュメント

# 「決断」にいたる道

Why America Did It

ヒロシマの閃光が人々の脳裏から消え去ることはない  
50年前の夏、原爆投下を選択した当局者たちは  
みずからの決断をどうとらえていたのか

エバン・トーマス(ワシントン支局長)

## 本

土上陸作戦の開始  
を待っていた米兵  
たちにすれば、一  
九四五年八月の広

島と長崎への原爆投下は完全に正  
しい判断だった。

「銃を空にぶっ放し、踊りまっ  
た」と、ライフル小隊の隊長だっ  
たポール・ファッセル少尉(当時  
二二歳)は回想する。「みんな勇敢  
なふりをしていたが、このときは

KEVSTONE PARIS-SYGMA/IMPERIAL PRESS



1945年8月9日、長崎上空に立ちのぼったキノコ雲

現代史家のなかには、原爆投下  
は反倫理的なだけでなく、戦略的  
に不必要な攻撃だったというグル  
ープもある。日本の敗北は四五年  
夏までに決まっておき、軍国主義  
体制は本土上陸作戦を待たずに崩  
壊したはずだというのが、彼らの  
一致した見解だ。

さらに一部には、原爆投下はか  
えって戦争を長引かせたという意  
見である。この見方によれば、

本誌はトルーマン大統領と側近  
たちが残した日記や発言に基づい  
て、原爆投下の決定にいたるまで  
の過程を再構成してみた。そこか  
ら浮かび上がってきたのは、政策  
決定者がいだいていた切迫感と恐  
れ、そして明快で説得力ある議論  
の欠如だった。

当時のアメリカには、現代の私  
たちが想像する以上に厭戦気分が  
広がっていた。原爆開発に携わっ  
た研究者は、この新兵器の

威力を十分にわかっていな  
かった。政府や軍の最高責  
任者は、人道上の問題より  
戦争をいかに早く終わらせ  
るかで頭がいっぱいだった。

当時の状況を考えれば、  
原爆投下の決断はやむをえ  
ないものだった。避けられ  
なかったといえるかもしれ  
ない。厳密にいえば、あれ  
は決断と呼べるようなもの  
ではなかったからだ。当時

の指導者の間で、原爆投下  
の是非が慎重に論じられた形跡は  
ほとんどない。

えてして戦時中の政府の行動は、  
責任者の個人的性格と時の勢い  
によって決まる。原爆投下も例外で  
はなかった。

ハリ・トルーマンといえば、  
今では決断と良識の人というイメ  
ージが定着している。「最終責任は  
私が取る」と書いた札を執務室の  
机に置いていたというエピソード

かりは喜びと解放感から大声で叫  
んだ。これで死なずにすむ、大人  
になるまで生きていける、と」  
それから半世紀、当時の解放感  
は不確かな思いと後悔の念に取っ  
て代わられた。先頃アメリカで実  
施された世論調査によると、高齢  
者の間では今も原爆投下を肯定す  
る声が多く、若者には、原爆  
使用を否定的にみる向きが多い。

アメリカが原爆を投下した本当の  
ねらいは日本を倒すことではなく、  
ソ連という新たな敵を威嚇するこ  
とにあった。

### 「最終責任」は私がとる

だが、あのときどうすべきだっ  
たのかをあれこれ論してもあまり  
意味がない。むしろ大切なのは、  
当時の指導者が何を話し合い、何  
を考えていたかだろう。



は有名な話だ。

だが四五年四月一二日、急死したフランクリン・ルーズベルトの後を引き継いで大統領に就任した当時のトルーマンは茫然自失の状態だった。友人の上院議員に「とてもじゃないが私は大統領の器じゃない」と漏らしたり、「私のために祈ってくれ」と涙ながらに記者団に訴えたこともあった。

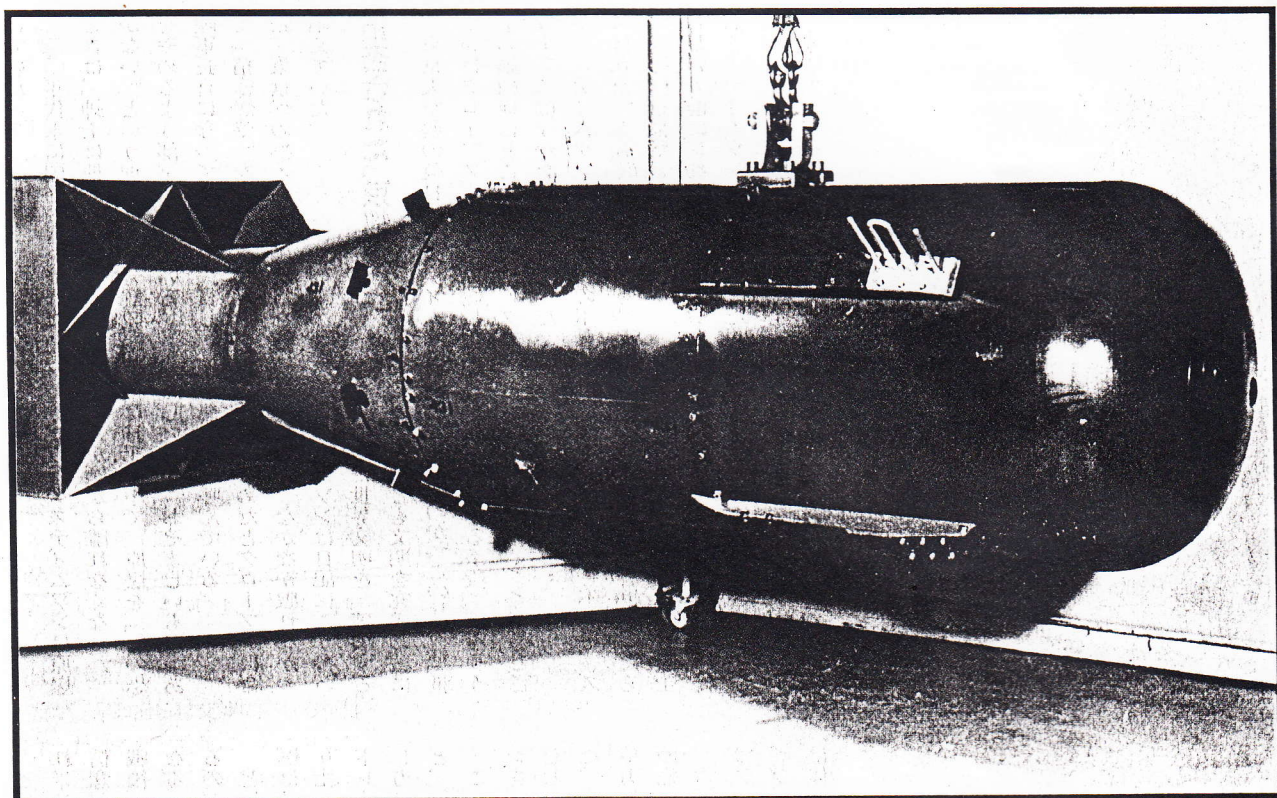
## 攻撃目標は減るばかり

トルーマンは大統領就任から二週間たっても、極秘裏に進行していたマンハッタン計画（原爆開発プロジェクト）の詳細を知らされていなかった。計画の責任者レズリー・R・グローブズ将軍が、新大統領は計画を黙認すればそれだけでいいと考えていたからだ。

グローブズは、太った体に自信とうぬぼれを詰め込んだような性格だった。高官を部屋の外で一時間も待たせては、ドアから顔を出して「そこで何をしてるんだ？」と詰問するのが大好きだった。

この「原爆将軍」の下、約二〇万人が三七の秘密工場や研究所でマンハッタン計画のために働いていた。だが自分たちが何を作っているのか、知っている人間はほとんどいなかった。

グローブズは人を操るのが得意だった。トルーマンがルーズベルトの肖像画を部屋に飾っているのを知ると、原爆開発が成功しなけ



UPI-BETTMANN

エノラ・ゲイが広島に投下した「リトル・ボーイ」と同型の爆弾

れば「ルーズベルト氏の名譽が傷つきます」とささやいた。

だが自信満々の態度の裏で、グローブズは原爆が役立たずのガラクタになる事態を心配していた。実際、軍内部からは新兵器の威力に懐疑的な意見が出ていた。当時の大統領首席補佐官だったウィリアム・リーヒー提督などは、原爆を「あんなクズ」と呼んでいる。

マンハッタン計画につき込まれた費用は二〇億（現在の二兆円以上に相当）。もし計画が失敗すれば「議会による空前の調査」が始まり、グローブズの責任が問われることは目に見えていた。

原爆の開発に携わっていた科学者は新兵器の威力に自信をもっていたが、正確にどれくらいの破壊力があるのかはよくわからなかった。軍の作戦担当者は、原爆投下後に焼夷弾による空襲を重ねて実施すべきだという慎重論を展開した。彼らには、一発の原爆に戦争を終

わらせる力があるとは思えなかったからだ。

グローブズは、自分の「おもちゃ」の威力を見せてやりたかった。だが四五年の春が終わるまでに、原爆の攻撃目標は少なくなっていた。

## 文明的な戦争を信じた者

この年の三月、B29の出撃回数は一〇日間で一万一六〇〇回を記録。日本の大都市は八〇〇〇軒が火の海と化し、少なくとも一五万人が死亡した。五月二五日の東京大空襲では、地上で焼ける死体の臭いをはるか上空にいたB29の乗組員もかぐことができた。

空襲の損害報告を読んで、このままでは原爆の威力を誇示できる舞台がなくなるのではないかと、グローブズは心配になった。

数少ない候補地の一つが、人口二八万の広島だった。グローブズの部下が作成した報告書には、広島は山に囲まれているので「爆風が閉じ込められ、破壊力が大いに強まる」とあった。

だが市内を川が縦横に走る広島は、「最善」の候補地とはいえなかった。爆風の威力を高めるには京都のほうがいいと、グローブズは考えた。多くの文化遺産がある古都である点も、グローブズは気に入った。ここなら、日本側も原爆のもつ「重要性を認識しやすい」と考えたからだ。



冷酷に聞こえるかもしれないが、当時としては必ずしも非常識な考え方ではなかった。第二次大戦の開戦当初は、まだ民間人を巻き込む都市空爆は邪道だとする声が多かった。だが戦争が長引き、厭戦ムードが広がるにつれて、敵の都市をたたくのもやむなしと考えられるようになった。

日本人のしぶとさは、「カミカゼ」特攻隊や、沖縄と硫黄島の玉碎戦術で証明されていた。日本を降伏させるには思い切った手段が必要だと、当時のアメリカでは考えられていた。本誌の四五年三月一九日号も、「おそらく一〇〇万人が家を失った」として東京への空襲に喝采を送っている。

## 拒否された「京都爆撃」

東京大空襲の数日後、スティムソンはグロブズを呼んで原爆投下の候補地はどこかと尋ねた。グロブズはなかなか答えなかったが、スティムソンが「この件のボスは私だ」と強く迫ると、ようやく目標は京都だと話した。

だいたい前に京都を訪れたことがあるスティムソンは、あそこはだめだと言った——日本文化の中心地を破壊してはならない、リンカーン記念堂を破壊するのと同じことだぞ。

それ以来、スティムソンは原爆のことが頭から離れなくなった。彼は日記の中で、原爆を「あの恐ろしいもの」「おぞましいもの」「あの悪魔」と呼んでいる。

京都はだめだとグロブズに命じた日の夜、なかなか眠れなかったスティムソンは日記にこう書いた。原爆は世界文明を「破壊するの、か、それとも文明を完成の域に高めてくれるのか。この兵器は、世界平和を実現する手段」になりうる。いや、「フランケンシュタイン」なのかもしれない……。

原爆に対する期待と不安は、スティムソンの過去の経歴がもたらしたのだ。ウォール街での弁護士時代、彼は「倫理」を重んじ、怪しげな依頼を決して引き受けなかった。しかし一方では、現実の世界では打算や駆け引きが必要なものも学んだ。

この原則論と現実主義が融合され、スティムソンのなかで強固な信念が形づくられた。アメリカは戦後の世界で唯一最大の指導国となるべきであり、その下地を整えるのが自分の使命だという信念だ。どれほど恐ろしいものでも、原爆は外交という名のゲームで「切り札」となりうる。「ロイヤル・ストリート・フラッシュ」と同じ。出し方に気をつけなければいけない」と、彼は日記に書いている。

こうした使命感が、スティムソンを押しつぶしていった。すでに七七歳、肉体的にも無理がきていた。乗馬やパドルテニスを楽しむ体力はあったが、不眠症とひどい頭痛に悩まされていた。

## アメとムチの対日攻勢

だが、それだけの犠牲ですむ保証はなかった。日本兵は爆撃ごと戦車に休んだりする訓練を受けていた。女学生は敵に辱めを受ける前に「腹を刺せ」と教えられ、大工道具のキリを支給されていた。

## ②コロネット作戦

(1946年3月1日開始予定)

第1軍が九十九里浜に上陸し、東京をめざす。第8軍は相模湾を強襲し、東に進んで三浦半島を制圧する。九州上陸作戦よりもはるかに大規模な作戦だが、実行される可能性は低かった

資料: "WAR MAPS," BY SIMON GOODENOUGH AND "THE INVASION OF JAPAN," BY JOHN RAY SKATES, RESEARCH BY BRAD STONE—NEWSWEEK





# A Silent Bomb

**The bomb killed more than 150,000 people in Hiroshima and Nagasaki immediately or within a few months, but the survivors' cancer rates have been only slightly above normal—and their offspring show no genetic damage**

BY TOM MASLAND

**H**IROTO KUBOURA was about to make a phone call inside the Hiroshima train station when the pressure wave from the bomb knocked him unconscious. He lost his left eye, and developed kidney, liver and pancreas problems, but the fear that consumed him was that the effects of the radiation would be visited on any children he might one day father. Soon after a go-between set up an *omiai* (arranged marriage) with a woman from Shikoku island, Kuboura's son was born. "I kept asking myself again and again: 'Is he all right? Is he really all right?'" he said. The child was fine. But the couple decided not to have another, thinking they might not be spared twice. "Scientists and doctors say that there is no genetic effect, but they still cannot wipe out my anxiety and my fear," said Kuboura, 69.

The immediate horror of Nagasaki and Hiroshima was plain to see—charred bodies and hideously disfigured survivors. Thousands of people who survived soon died because their germ-fighting marrow had been blasted by radiation. And those first deaths—some 180,000 people—initially seemed like just the beginning of the trauma: by 1946, experiments on mice proved that radiation can cause both cancer and genetic defects in the offspring. But now, after 50 years of what is arguably the longest and most comprehensive health study ever undertaken, the scientific consensus holds



INDELIBLE SCARS OF NAGASAKI

that the long-term effects on the *hibakusha* (survivors) and their children have been significantly less than the victims, the public and even scientists expected.

Many survivors did continue to suffer, of course. The Japanese and American scientists of the Radiation Effects Research Foundation reported last year that exposure to the bomb's radiation increased the frequency of nine forms of cancer, especially leukemia. Among the study group of

86,000 people, the A-bombs caused about 420 more cases of cancer than would have occurred naturally. That's an added cancer risk of 8 to 12 percent. And 21 of 300 pregnancies underway in August 1945, most notably those in the eighth to 15th week, produced children with severe mental retardation. That's more than four times the

number in healthy mothers. But contrary to the view that the suffering would reverberate through the generations, the number of stillbirths or other birth defects was no higher than in a healthy population. And tests of 72,216 children born more than nine months after the blast show no increase in birth defects, chromosomal abnormalities or cancers. The decades of research have so far failed to find "any significant genetic effects" in the survivors' children, reported RERF's Yasuhiko Yoshimoto in 1990. That finding contradicts the widespread fear that the victims would be genetic time bombs, carrying mutated reproductive cells that would cause genetic damage in their children.

Scientists offer several possible explanations for the optimistic findings. One is that humans may simply have better biochemical mechanisms for repairing damage caused by radiation than lab animals do. Or, as RERF reported in 1987, the radiation dose that victims received was less than originally thought; in particular, Little Boy emitted far fewer damaging neutrons than scientists at first calculated. Victims distrust

these conclusions, and statistics alone can't eliminate the fear of the "silent bomb"—especially when Japan adds every survivor's death, no matter what the cause, to the list of A-bomb martyrs. Nothing will ever remove the physical and psychic pain of the *hibakusha*, but now, at last, there is hope that the suffering will stop with one generation.

With HIDEKO TAKAYAMA in Hiroshima and  
IRENE RICASIO in New York